広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	サバティーニ教授の『イタリア語史講義』ノート
Author(s)	古浦, 敏生
Citation	ニダバ , 18 : 60 - 63
Issue Date	1989-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044722
Right	
Relation	

報　告

サバティーニ教授の『イタリア語史講義』ノート

古　浦　敏　生

筆者は1987年10月より翌年 8月まで、文部省在外研究員としてイタリアのローマ大学教育学部で、Francesco Sabatini教授（1931年生まれ）の「イタリア語史」・「イタリア語文法」・「イタリア語教授法」の講義を聴く機会に恵まれた。本稿ではこれら 1年分の講義のうち、筆者にとって最も興味深い「イタリア語史」の部分をピック・アップし、その概要を述べ、筆者の感想を付加することを目的とする。

（I）「イタリア語史講義」概要

イタリア共和国には、イタリア語以外の言語が多々存在する。例えば、北伊国境地域のラディン語・オック語・ドイツ語・スロベニア語のほか、南伊にもアルバニア語・ギリシァ語・セルボクロアチア語・フランコ・プロヴァンス語の言語的離島が存在するし、サルデーニア島西北部の町アルゲーロではカタラン語が今日でも使用されている。従って、「イタリアの言語史(storia linguistica d'Italia）」と「イタリア語史(storia della lingua italiana)」とは別物である。

ロマンス諸語は大きく３つに分けられる。

(i)　ポルトガル語、スペイン語、カタラン語、フランス語、フランコ・プロヴァンス語オック語、イタリア語北部方言

(ii)　イタリア語中南部方言、ラディン語、ダルマチア語、ルーマニア語

(iii)　サルデーニア語（サルデーニア島の言語はイタリア語の方言ではなく独立した言語である）

だから、イタリア語北部方言とイタリア語南部方言との間に横たわる La Spezia-Rimini line　と呼ばれる等語線の束は、単にイタリア語を２つに分けるだけのものではなく、ロマンス語(i),(ii)を分断するものなのである。

イタリアの言語は次の４種に大別される。以下、それぞれの地域の言語的特色の主要なもの等をあわせ列挙する。

(i)　北イタリア方言地域（Italia settentrionale）

（イ）母音間２重子音の単子音化［lat. octo > otto > oto「8」］

(ロ) 単一の母音間無声子音の有声化 [lat. caput > capo > cavo 「頭」]

(ハ) 無強勢母音の脱落

(ii) 中南部イタリア方言地域 (Italia penisulare)

(イ) 母音間２重子音の保持 [lat. octo > otto「8」]

(ロ) 単一の母音間無声子音の保持 [lat. caput > capo「頭」]

(ハ) 無強勢母音の保持

(iii) サルデーニア語地域 (Italia sarda)

(イ) 複数の形態素-sの保持 [carta「紙（単数）」：cartas「紙（複数）」]

(ロ) ce, ciにおけるｃの音価が [k] であること

(ハ) 定冠詞がラテン語の強意代名詞の ipsumに由来 [su（男性単数），sos(男性複数），sa（女性単数），sas（女性複数）]

(ニ) 他のロマンス語領域では失われたラテン語語彙の保持 [domus「家」。イタリア語では casa]

(iv) ラディン語地域 (Italia dolomitica)

この地域では friulano,grigionese,dolomitico の３種の言語が用いられている。これら３種は元来同じものであったが、friulanoとdolomiticoとの間にはイタリア語ヴェネト方言が、dolomiticoとgrigioneseとの間にはドイツ語がそれぞれ侵入し、三者を分断してしまった。

このような言語・方言差が生ずる１つの理由として、地理的要因が挙げられる。例えばフィレンツェ・ボローニア間はわずか 100kmの距離なのだが、その間にアペニン山脈がたちはだかり、コミュニケーションが遮断されていたので、方言差は大きい。また、コルシカ島の言語は、海をへだててはいても往来が容易であったトスカーナ・ウンブリア地方の方言と類似している。

一方、先住民族の基層の差、その後の他民族の侵入・移動など政治的要因も大である。ローマ帝国成立前、北伊にはガリア人が、中伊にはエトルスク人が、南伊にはフェニキア人・ギリシァ人・イリュリア人がそれぞれ住んでいた。ローマ帝国成立後、まず、A.D.５世紀末よりゴート族・ロンゴバルド族・フランク族といったゲルマン人が北伊に侵入し、その後９世紀にはアラブ族のシチリア島・南伊への侵入が在った。また、10世紀には南伊がビザンツ領となり、コイネー・ギリシァ語が普及した。中世以降はフランスの勢力が拡大し、この間のフランス語の影響も大きい。10世紀ー12世紀には、ヴェネツィア、ジェノヴァ、ナポリなどの海岸都市 (città marina) が貿易で巨万の富を得た。従って、これらの都市の方言がイタリア各地に伝播したことも見逃せない。例えば、コルシカ島にはジェノヴァ方言が、イストリア半島にはヴェネツィア方言が入り込んだ。11世紀ー12世紀にかけて、ノルマン人がシチリア島に侵入し、シチリア王国を建設した。その後、北伊ピエモンテ・ロンバルディーア地方から、シチリア島へ農民が多数移住させられ、その結果、シ

チリア島では今日でも、ピエモンテ方言・ロンバルディーア方言が一部残存することとなった。シチリア王国の支配権を継いだフェデリコ２世の時代になると、詩人でもあった国王のもとへプロヴァンス出身の詩人達が集まり、それに伴って文語プロヴァンス語がシチリアに上陸し、これが特にシチリア文語に多大な影響を与えた。

このように、イタリア語にはたくさんの民族の言語の種々雑多な要素が混入している。それはちょうど、ミネストローネ（いろいろな野菜や豆などが入ったスープ）にもたとえられよう。

14世紀－15世紀までは、イタリア語（lingua italiana ）というものはなかった。在ったのはフィレンツェの方言（lingua fiorentina ）、トスカーナ地方の言語（lingua toscana ）といった地方語・方言であった。いわゆる三大作家ダンテ（1265-1321 ）、ペトラルカ（1304-74 ）、ボッカッチョ（1313-75 ）の用いたトスカーナ文語は、他の諸方言と比べてよりラテン語に近かったので、イタリア全土で理解され易く、従って、これを共通イタリア文語にしようとの発想が生まれた。その提唱者は、ピエトロ・ベンボ（1470-1547 ）を代表とする当時の文人達であった。これは広く受け入れられ、のちの言語統一に大きく寄与することとなる。フランスやスペインでは政治的中心地の方言が国語として採用されたのであるが、イタリアでは文化的中心地であったフィレンツェの言葉が選ばれた点がおもしろい。

アレッサンドロ・マンゾーニ（1785-1873 ）はミラノ生まれであったが、フィレンツェの口語（lingua parlata ）によるイタリアの言語統一をめざし、その言語調査のため42才にして初めてフィレンツェに乗り込んだ。その日は1827年11月 8日であった。当時はボローニア・フィレンツェ間の交通が困難を極めていたので、ミラノからジェノヴァ経由でフィレンツェに到着したのである。「言語は社会的な道具（strumento sociale ）であって、文学の道具（strumento letterario）ではない」というのが彼の基本的な考えであった。そして彼は、代表作『婚約者（I promessi sposi）』（ロンバルディーア語法の現れる1825-6年の初版を、フィレンツェでの言語調査の後、フィレンツェ語法に手直しをして1840- 42年、決定版とした）の中で、フィレンツェの会話体の語彙・語法に基づいた模範的なイタリア語を実践・呈示した。彼の採用した語彙の80% はフィレンツェのものだと言われる。

マンゾーニの考え方に批判的であったのは当時の少壮文法学者グラツィアディーオ・イザヤ・アスコリ（1829-1907 ）であった。アスコリは「共通語の語彙は、フィレンツェの会話体の語彙に限定せず、フィレンツェ以外の地方語であっても、また、たとえ文語体であっても、それが全イタリアに広まっているものならば採用する」という立場であった。そして、『イタリア言語学紀要（略称 AGI）』の創刊号（1873年）の中で、イタリアの言語統一問題に関する彼の所見を発表している。この論文のタイトルは Proemio「序言」というものであるが、彼の文章は誇張表現や擬人化も多く一般の人々には難解であり、従っ

て、読者も少なく損をしたうらみがある。

しかし、マンゾーニの提唱した「フィレンツェの会話体を基本とした言葉」も、当時、70％以上が文盲だったこともあって、容易には普及しなかったが、1859年、初等教育が9才まで義務づけられ、それを期に徐々にイタリア語の成立へと向かったのである。

（ＩＩ）感想

以上が一年分の講義内容の骨子である。叙上の事柄にまつわる種々のエピソードの中には興味深い事柄も多かったが、これらは今回割愛する。

講義内容は大きく３部に分けることが出来ると思う。

（1）ロマンス諸語内でのイタリア語の共時的な広がり

（2）イタリア語の通時的変遷

（3）イタリアの言語統一の問題

このうち最も念入りに解説されたのは（3）の項目であった。具体的には、『婚約者』の初版と決定版との間で、マンゾーニ自身が訂正した箇所の検討、アスコリの『序言』の原文を読みながらの内容説明、などが挙げられる。このマンゾーニ・アスコリ論争は、20年前にはどのイタリア人言語学者も注目していなかった事らしく、この点に詳しいトリーノ大学のクラウディオ・マラッツィ助教授を授業中の報告者に招き、出席の学生も交えて討論するほどの熱の入れようであった。ラテン語からイタリア語への変遷（特に、1200年代のイタリア語からダンテに至るまで）にスポットを当てて研究を進めてきた筆者には、サバティーニ教授のイタリア語史の力点がもっと新しい時代に置かれていることを知り、新たな視界が開けた思いであった。

また、イタリア語の方言区分に関して、北部方言、トスカーナ方言、中南部方言の３つを同列に置いて考える学者が多いのであるが、サバティーニ教授は、トスカーナ方言を中南部方言の中に含めておられる点に特徴がある。

なお、この他の講義内容（「イタリア語文法」、「イタリア語教授法」）に関しては、別の機会に譲りたい。